

[研究ノート]

中国語を母語とする日本語学習者における 確認要求表現「(ん)じゃないか」の使用実態と意識

橋本直幸、王 杉、鋤野亜弓
辺 紅梅、美玲、李 会婧

1. はじめに

本稿では、日本語における確認要求表現としての「じゃないか」「んじゃないか」という表現を対象とし、中国語を母語とする日本語学習者がこの二つの表現をどのように理解し、使い分けしているかを探る。ここで対象とする「じゃないか」「んじゃないか」とは、以下 (1) (2) のようなものである。

(1) A：鍵、どこにあるか知らない？

B：ほら、よく見ろよ。ここにあるじゃないか。(作例)

(2) A：雨、ひどいね。明日、運動会できるかな？

B：明日も朝から雨みたいだから、運動会はできないんじゃないか？
(作例)

(1) は、探し物が見つからないと言っている相手に対して、すぐ目の前にあることに気づかせるような文脈での発話である。(2) は、翌日に運動会が行われるかどうかという話題に対し、翌日も朝から雨が降る可能性があるという情報をもとに、運動会はできないだろうと話し手自身が判断していることを表明するような文脈での発話である。(1) も (2) も文末に「じゃないか」という表現が使用されているが、(2) のほうは、「じゃないか」の前に「の（話し言葉では「ん」）」を伴う。この二つの「じゃないか」は用法も使用される文脈も異なるものであるが、日本語学習者の使用例を見ると、両者を混同している例が多く見られる。

例えば、次に挙げる (3) (4) は、ACTFL-OPI^(注1) においていずれも「上級—上」という判定を受けた、中国語および韓国語を母語とする学習者の発話である。

- (3) 値段として、一番安いやっぱりー、全般的にみたらやっぱりー、ふくお、福岡ほうのほうがいじゃないかな、気がします。

(「KY コーパス」CAH03中国語母語・上級(上))

- (4) 例えばあの、広島にある原爆記念館とか、あの平和祈念館とかあるんじゃないですか、そっちに行って、まちゃんと見る、ちゃんとう、なんか事実を見る、日本の人たちが、あの、ま、た、あの、小学校とか中学生が、まあ1回では、ちゃんと見られないと、聞きました。

(国立国語研究所「日本語会話データベース」091韓国語母語・上級(上))

(3) は、「安いんじゃないかな」のように「ん」を伴う必要がある。また、(4) については、上昇イントネーションを伴って発話されれば問題はないと思われるが、ここでは下降イントネーションを伴って発話されており^(注2)、その場合、「ん」は不要である。このことは同じく OPI データを分析した家村 (2003) でも報告されている。家村 (2003) は、中国語母語話者を対象に、日本語の否定表現の習得過程を観察したものであるが、「ん (の)」の脱落や不必要な挿入が上級話者においても観察されることを指摘し、さまざまな否定表現の習得において、確認要求の「じゃないか」がその最終段階に位置するものと結論付けている。

このほか、日本語学習者の「じゃないか」(書き言葉を含む) を扱った研究として、金 (2001)、奥野・金庭・山森 (2012)、橋本 (2015) などがあるが、いずれも一方の用法のみを取り上げたもので、この両者の使い分けの実態や意識について触れた研究は見当たらない。

本稿では、これらの問題意識の下、学習者の使用実態を明らかにし、さらにフォローアップ・インタビューを通して、学習者が考える使用ルールについても明らかにしたい。なお、今回は中国語を母語とする学習者を調査対象とするが、両者の混同は学習者の母語にかかわらず見られることから、母語による影響は少ないと考えている。本稿ではひとまず、母語との対照を通した考察は行わないこととする。

また、本稿では主に話し言葉での使用例を考察対象とし、二つの用法をそ

れぞれ「じゃないか」「んじゃないか」と表記するが、両者を一括して表記する場合は、「(ん) じゃないか」とする。なお、2.2節で詳しく述べるが、「じゃないか」も「んじゃないか」も接続する品詞や文脈によっては、「ん」が挿入されたり脱落したりする場合があるが、本稿では二つの用法の表記方法をそれぞれ「じゃないか」「んじゃないか」で代表させることとする。また、文末も「じゃない」「じゃないか」「じゃないかな」など様々な形式が見られるが、とくに文末形式に注目しない場合は、「(ん) じゃないか」で統一する。

2. 「(ん) じゃないか」について

「(ん) じゃないか」が位置づけられる「確認要求表現」とは、「話し手に何らかの判断が成立しているということを前提として、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求める」(日本語記述文法研究会(2003))という機能をもった表現である。さまざまな形式があるが、本稿で扱う「(ん) じゃないか」も、この確認要求表現の一つとして位置づけられる。本節では、学習者の実態調査の前に、まず先行研究をもとに「(ん) じゃないか」の機能、接続、出現形式を、両者の比較を通して明らかにしておく。

2.1 「(ん) じゃないか」の機能

「(ん) じゃないか」については、国立国語研究所(1960)以降、田野村(1990)、蓮沼(1995)、三宅(1996)、安達(1999)、宮崎(2000)など、主に1990年代を中心に日本語の記述的研究の立場から多くの言及がある。

それぞれに類似表現との違いなどを通して、確認要求表現の体系性について論じている。詳細はそれぞれの論考に譲るとして、ここでは、これら1990年代に研究が深められた日本語の記述的研究の一定の成果ともいえる日本語記述文法研究会(編)(2003)から、「(ん) じゃないか」の機能・用法をまとめる。

じゃないか：話し手と聞き手が同一の知識状態にある事柄を聞き手に想起させたり、気づかせたりする機能をもっている。

- [1] 相手が忘れていることを思い出させたり、会話のテーマを導入したりする用法
- [2] 気付くべきこと、知っているはずのことに聞き手を気付かせる用法(非難)
- [3] 発見のニュアンスを持つ用法

んじゃないか：話し手の判断が未成立ながら一定の方向性をもっていることを表す。

- [1] 推量的な用法（話し手だけでなく聞き手も知ることのできないことを述べる場合）
- [2] 話し手の推量的判断を示しつつ、同時に聞き手はどう思うかということを行う用法
- [3] 推量的な意味に積極的な問いかけ性が加わり、話し手の推量判断の妥当性を聞き手に確認する用法

宮崎（2000）は、確認要求の用法の説明において、〈聞き手依存型〉と〈聞き手誘導型〉という概念を用いている。〈聞き手依存型〉とは、「確かな情報を有していると思込まれる聞き手の応答に依存してその情報の確定化を図る」ものであり、話し手自身の認識が不確かな状況での確認要求がこれに相当する。一方、〈聞き手誘導型〉とは、「聞き手の認識を誘導して共有情報の確立を図る」ものであり、話し手の認識が確かな状況で行われる確認要求がこれに相当する。本稿で対象とする表現に当てはめると、「んじゃないか」が〈聞き手依存型〉、「じゃないか」が〈聞き手誘導型〉である。

〈聞き手依存型〉〈聞き手誘導型〉は話し手の立場から見たタイプ分けであるが、これを聞き手の立場から考えると、聞き手は「当該発話の話者が自分（聞き手）に対して何を求めているか」を読み取り、適切な反応をしなければならないということになる。つまり、相手が〈聞き手依存型〉で求めてくれば、聞き手である自分は相手の認識を確実なものとするために、適切な情報を提供する必要がある。また、相手が〈聞き手誘導型〉で求めてきた場合は、相手の誘導に従って、自分の認識を確実なものとするよう修正したり、想起したりしなければならない。文脈によっては自分に非難が向けられていることを察しなければならない。自分の認識が頼りにされているのか、逆に、認識を修正するよう求められているかは正反対のものであり、両者を混同した場合、コミュニケーション上、大きな支障を来すこととなる。日本語教育の観点からは、「産出」においても「理解」においても非常に重要だということであり、その点からも、日本語学習者の発話に見られる両者の混同は、良好な人間関係を構築するうえで、避けなければならないものであろう。

2.2 「(ん) じゃないか」の接続

両者の使い分けにおいて、日本語学習者を悩ませる原因の一つとなっているのが、用法ごとの接続の複雑さである。それぞれの用法における名詞、動

詞、形容詞への接続は、表1のようにになっている。非過去形と過去形をあわせて記述する。

表1 「(ん) じゃないか」の名詞・動詞・形容詞への接続

	じゃないか	んじゃないか
名 詞	ほら見ろ、やっぱりこっちは(雨／雨だった) <u>じゃないか</u> 。	この分だと、東京は(雨な／雨だった) <u>ん</u> じゃないか。／この分だと、東京は(雨) <u>じゃないか</u> ？
動 詞	ほら見ろ、やっぱり田中は(来る／来た) <u>じゃないか</u> 。	もしかしたら、田中は(来る／来た) <u>ん</u> じゃないか。
形容詞	なんだ！このメロンは。ずいぶん高い <u>じゃないか</u> 。	ひょっとしてこのメロン、(高い／高かった) <u>ん</u> じゃないか。

混乱を来す一つの原因は名詞接続の場合、「んじゃないか」が「この分だと、東京は雨じゃないか？」のように「じゃないか」にもなり得るということになる。また、「んじゃないか」の「ん」は、田野村(1990)で「「のだ」の流用」と言われるもので、いわゆる関連付けを表す「のだ」ではないとされるが、その一方で、「じゃないか」には、関連付けの「のだ」が現れる場合もあり、その場合は、形式上は「んじゃないか」となり、ここでもやはり両者の区別はできないことになる。本稿では、関連付けの「のだ」が共起した「じゃないか」については、取り上げないこととする。

2.3 「(ん) じゃないか」の出現形式

両者については、実際の文脈で使用される際の出現形式についても顕著な違いがある。まず、「じゃないか」は基本的に「じゃない」「じゃないか」「じゃないですか」のかたちで用いられる。文末「か」の有無、文体を調整する「です」の有無のみで、それ以外のバリエーションはない(地域差、年齢差など話し手の属性によるバリエーションはここでは考えない)。それに対し、「んじゃないか」は、安達(1999)で、「話し手のほうが情報的に優位にある事態に言及する場合、「のではないか」はそのままのかたちで使うことはむしろかしく、「かな」や「だろうか」を文末に付加するか「と思う」を付け加えることなどで聞き手への伝達であることを明示せず、まるで話し手が心中で考えているようにして伝えるという手段をとる。」(p.129)と指摘されているよう

にさまざまな形態的バリエーションをもって現れる。出現形式の違いに注目することは、日本語教育に母語話者の使用実態を反映させるべきだとする近年の日本語教育研究においても非常に重要な視点であるし、また、共起する形式が学習者の理解の助けにもなる可能性を考えると、やはり重要な観点であると言える。

3. 日本語教育における扱い——日本語教材における記述

ここでは現在の日本語教育現場における「(ん) じゃないか」の扱われ方を明らかにするということを目的に、市販の日本語教材の記述を見る。

3.1 中級総合教科書および会話教材における記述

まず、総合教科書および会話教材での記述を見る。「(ん) じゃないか」はどちらも中級以降で扱われる表現であり、初級の総合教科書で扱われているものはない。総合教科書においてこれらの形式が扱われるようになるのは中級以降の、とくに機能や場面を中心としたシラバスによる教科書においてである。機能シラバスの先駆的な教科書である『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学総合言語センター日本語科編(1988))では、第7課「考えを言う」の中で「んじゃないかと思います」「んじゃないでしょうか」「んじゃない」を取り上げている。ここでは「非直接的表現」として、「そうですね。あのう……こちらのほうがわかりやすいんじゃないかと思いますけど。」という例文を挙げ、「あのう」や「けど」による言い切りなどとあわせて、控えめな主張をする表現の一つとして提示している。

また、『Situational Functional Japanese』(筑波ランゲージグループ(1992))では、Volume 3の22課「お見舞い」という課で「んじゃないかと思う」というかたちで導入されている。モデル会話で、持参したお見舞いの品(音楽のテープ)について「たまには、ポップスもいいんじゃないかと思って」という例文を挙げ、その文法解説である「Grammar Note」において、「と思う」「だろうと思う」などと比較し、それらより確実性の低い表現であると説明している。また、それぞれの品詞との接続についても説明してある。

『みんなの日本語中級Ⅰ』では、第5課で「…んじゃない?」という項目として取り上げており、教師用指導書では以下のように解説している。

提案をする、あるいは相手を慰めたり安心させたりする、相手とは違う考えを控えめにいうときなどに使われることが多いので、そのような状況設定をして、やり取りの練習を広げるとよい。

(『みんなの日本語中級 I 教え方の手引き』)

「んじゃないか」は自分の意見を控えめに主張するための非常に使い勝手のよい表現であり、中級以降のコミュニケーション能力の向上を目指す教育においては、重要な表現であると考えられていることが伺える。

会話に特化した教材でも、しばしば扱われる。『新版ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』(山内 (2014)) では、付録の機能別上級会話表現の中の「意見を言う」機能の表現として「んじゃないかな」を提示している。『にほんご会話上手! 聞き上手・話し上手になるコミュニケーションのコツ15』(岩田・初鹿野 (2012)) では、「相手の話に共感できないときは…」という場面で、「間接的な表現」の一つとして「そんなことないんじゃない?」という文を提示している。ただ、同じ課の練習問題の中で、「そんなことないよ。この間の発表だってうまくいったじゃない。」という文が出てきており、混乱を来す可能性はある。

ここまで見てきたように、中級以降とくに機能を中心としたシラバスで構成される教科書や会話教材では、「んじゃないか」が扱われている。

一方で、「じゃないか」は〈発見〉や〈驚き〉という用法もあるが、〈非難〉という用法もあるためか、会話で積極的に指導するのは控えるという方針がうかがえる。読解中心の教科書である『日本語3rd ステップ——表現文型で学ぶ中級からの日本語』(石川・山本・日高 (2008)) では、まさに〈非難〉という用法で提出されている。

3.2 文型辞典および文法教材における記述

次に文型辞典や、文法に特化したワークブックなど、広く文法形式を網羅しているものについて見ていく。『教師と学習者のための日本語文型辞典』(グループ・ジャマシイ (1998)) は、「ではないか₁」「ではないか₂」として両者を取り上げている。「ではないか₁」はその用法として〈驚き・発見〉〈非難〉〈確認〉を挙げている。また、「ではないか₂」は、「普通体の表現に付いて、「はっきりそうだと断定できないが、おそらく…ではないだろうか」

といった話し手の判断を表す」と説明している。接続の違いにも触れ、「ではないか₂」には、イ形容詞と動詞には必ず「の」が必要だということも記述されている。

また、『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現——モダリティ・終助詞——』（三枝・中西（2003））では、「「ではないか」と「のではないか」というページを設け、両者の違いについて練習問題も準備して説明している。ここでは「ではないか」は「反論」、「のではないか」は「主張のやわらげ」と説明している。『日本語文法セルフマスターシリーズ6 文の述べ方』（森山・安達（1996））においても、両者を取り上げられ、それぞれ詳しく説明されている。ただし、両者の違いや使い分けについては、説明は行われていない。

このように文型辞典や文法に特化した教材では、両者を取り上げているものが多く、中には、その違いや使い分けについても詳しく述べているものもある。

3.3 アカデミック・ジャパニーズ教材における記述

最後に大学生や大学院留学生を対象としたいわゆるアカデミック・ジャパニーズに関するものからその記述を見る。論文執筆のための教科書である『大学・大学院留学生の日本語②作文編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会（2001））では、巻末付録「意見の述べ方～主張する」の中で「主張の意は少し弱くなりますが、文末にバリエーションをつけることがあります」として、「と思う」「だろう」などと並んで「のではないか」を提示している。また、同シリーズの『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会（2002））においても、「考えや意見を述べる際に、よく使われる文末の表現」の一つとして、「のではないか」が紹介されている。同じく留学生のための論文執筆のためのワークブックである『大学生・留学生のための論文ワークブック』（浜田・平尾・由井（1997））では、「問題提起（疑問を示す）」、「意見提示（考察）」、「結論提示」の項で、「のではない（だろう）か」が、ほかの形式とともに紹介されている。ただ、いずれも詳しい説明はなく、バリエーションの一つとして提示されている程度である。

それに対し、同じく留学生のための文章表現の習得を目標とした『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』（石黒・筒井（2009））では、扱って

いる項目は同じ「のではないか」が中心であるが、「ではないか」との違いにも言及した踏み込んだ解説となっている。

「～のではないか／ないだろうか」は、書き手が言いたいことを慎重に示したいときによく使われます。ほかの人の意見に反論する場合や、結論を言う場合など、大切な文につくことが多いです。「の」がない「～ではないか／ないだろうか」は、文の述語が名詞のとき以外はあまり使われません。しかし、述語が名詞であっても、「それはなかなかいい意見ではないか」のような使い方は書き手の確信が強く出てしまい、押しつけがましく感じられるため、あまり使われません。(石黒・筒井 (2009) p.40)

会話、文法、読解などそれぞれの目的に応じて、両者を取り上げるか、あるいはどちらか一方をとりあげるかが異なってくることは自然なことと思われる。ただ、実際に学習者の使用に、用法や形式の混同が見られる以上は、どちらか一方のみを指導項目として取り上げる場合であっても、もう一方との違いに触れ、誤用が生じないようにする配慮は必要となってくるだろう。

4. 課題と本研究のアプローチ

4.1 課題

本稿では、「はじめに」に挙げた問題意識に基づき、以下、二つの課題を設定する。

【課題Ⅰ】中国語を母語とする日本語学習者が、「じゃないか」「んじゃないか」を使い分けられているかどうか明らかにする。

【課題Ⅱ】使い分けをしているとしたら、どのようなルールで使い分けしているのか探る。

4.2 本研究のアプローチ

4.1に挙げた【課題Ⅰ】を明らかにするために、日本語学習者を対象に、文脈の中で「じゃないか」「んじゃないか」の適切なものを選ぶ選択式テストを行う。また、【課題Ⅱ】を明らかにするために、選択式テストの後に、フォ

ローアップ・インタビューを行う。

5. 調査

5.1 調査の概要

(ア) 調査時期：2016年 7月

(イ) 調査対象者（被験者とする）：中国語を母語とする日本学習者40名
（日本語能力試験 N 1 以上…20名、日本語能力試験 N2…20名）

(ウ) 調査方法

〔調査1〕 選択式調査

選択式テストは、文脈の該当部分を空欄とし、そこに当てはまるものを、「じゃないか」「んじゃないか」を含む合計4つの選択肢の中から選ぶ形式である。問題文は「じゃないか」、「んじゃないか」のうち、それぞれ名詞に接続するもの、動詞に接続するもの、形容詞に接続するものを各2問ずつ準備し、それに「(ん) じゃないか」とは関係のないダミー問題7問を加えた全19問からなる。問題文は以下表2の通りである。下線部が調査において空欄とした部分である。なお、表2は出題順ではなく、用法別、品詞別に整理したものであり、括弧番号が出題番号を表す。

表2 選択式テストにおける調査項目と問題文

じゃないか	名詞	(4) A:「ほら、先週の月曜日休みだった <u>じゃない</u> 。」 B:「ああ、そうだったね。」
		(15) A:「(財布の中のレシートを見ながら) 先月の23日、渋谷で昼ご飯食べた <u>っけ</u> ？」 B:「先月の23日は祝日で休みだった <u>じゃない</u> 。それで、一緒に出かけたでしょ？」
	動詞	(1) 朝起きて見たら、「あ、(何年も咲かなかった) 花が咲いている <u>じゃない</u> 。今日はきっといいことがあるなあ。」
		(18) 「あら、どうしたの？ 珍しく頑張っている <u>じゃない</u> 。」
	形容詞	(14) 「やめなさい、そんなことするのは！ はずかしい <u>じゃない</u> 。」
		(17) A:「ねえ、このシャツどう思う？ ちょっと大きいかなあ。」 B:「そんなことないと思うけど。ちょっと着てみてよ。」 ……「やっぱり全然大きくない <u>じゃない</u> 。ちょうどいいよ！」

ん じ ゃ な い か	名詞	(12) A:「だれかがこの部屋にいたみたい。だれだろう。」 B:「もしかしたら山田さんだった <u>んじゃない</u> ?ここに山田さんのコップがあるし。」
		(19) (谷村さんの不審な様子から)「犯人は谷村だった <u>んじゃない</u> ?」
	動詞	(3) A:「バスまだかな。」／B:「そろそろ来る <u>んじゃない</u> ?」
		(8) 彼にはいろいろ問題があるけど、三人の中で一番積極性がある <u>んじゃない</u> かな。
	形容詞	(11) 子どものために英語を早めに教えたほうがいい <u>んじゃない</u> かと思う。
		(13) A:「1週間旅行しようと思うんだけど……。」 B:「1週間ならあまり問題ない <u>んじゃない</u> ?」

〔調査2〕 フォローアップ・インタビュー

フォローアップ・インタビューは、〔調査1〕の選択式テスト実施直後に行った。「使い分けのルールがわかるかどうか」「わかるとしたら、どのようなルールか」「習ったことがあるか」という3点を中心に確認した。

5.2 調査結果 (1) 選択式テストの分析

まず、調査結果について表3に示す。表3は正答率の高かった問題番号順に並べたものである。表中の用法という列に示したA、Bはそれぞれ「じゃないか」「んじゃないか」である。

表3 調査結果 (正答率順)

問題番号	用法	品詞	全正答者数 (正答率)	N1正答者数 (正答率)	N2正答者数 (正答率)	用法間誤答		
						全誤答者数 (誤答率)	N1誤答者数 (誤答率)	N2誤答者数 (誤答率)
11	B	形容詞	32 (80.0)	18 (90.0)	14 (70.0)	5 (12.5)	0 (0.0)	5 (25.0)
08	B	動詞	29 (72.5)	16 (80.0)	13 (65.0)	9 (22.5)	3 (15.0)	6 (30.0)
12	B	名詞	25 (62.5)	15 (75.0)	10 (50.0)	12 (30.0)	5 (25.0)	7 (35.0)
03	B	動詞	23 (57.5)	13 (65.0)	10 (50.0)	13 (32.5)	7 (35.0)	6 (30.0)
13	B	形容詞	20 (50.0)	12 (60.0)	8 (40.0)	15 (37.5)	8 (40.0)	7 (35.0)
19	B	名詞	20 (50.0)	9 (45.0)	11 (55.0)	5 (12.5)	2 (10.0)	3 (15.0)
14	A	形容詞	17 (42.5)	12 (60.0)	5 (25.0)	21 (52.5)	8 (40.0)	13 (65.0)
04	A	名詞	14 (35.0)	7 (35.0)	7 (35.0)	24 (60.0)	12 (60.0)	12 (60.0)
17	A	形容詞	14 (35.0)	8 (40.0)	6 (30.0)	20 (50.0)	9 (45.0)	11 (55.0)
01	A	動詞	11 (27.5)	6 (30.0)	5 (25.0)	27 (67.5)	13 (65.0)	14 (70.0)
18	A	動詞	11 (27.5)	3 (15.0)	8 (40.0)	27 (67.5)	16 (80.0)	11 (55.0)
15	A	名詞	8 (20.0)	3 (15.0)	5 (25.0)	30 (75.0)	16 (80.0)	14 (70.0)

「全正答者数」とは、N1と N2を合わせたすべての被調査者40名についての値であり、そのレベル別の内訳が「N1正答者数」と「N2正答者数」で各20名ずつの値である。誤答についても同様の表記をしている。なお、ここでの誤答は表中に「用法間誤答」と示した通り、「じゃないか」と「んじゃないか」の間における混同のみを表に示している。実際は四肢選択なので、「じゃないか」「んじゃないか」以外のものを選んだ被調査者もいるが、それについてはここでは誤答に含めていない。したがって、全正答者数と全誤答者数を合計しても40名になっていない場合もある。

表3から明らかな通り、全12問中の上位6問はすべてB「んじゃないか」、下位6問はすべてA「じゃないか」となった。この原因については、6節で考察を行う。品詞別に見ると、「んじゃないか」のほうは、動詞、名詞、形容詞の間に大きな偏りはないが、「じゃないか」のほうは、動詞に接続する場合は2問とも低い。これは動詞に直接「じゃ」が接続することに違和感を覚えた学習者が多かったことが予想される。つまり、本来、動詞に断定を表す「だ」（ここでは「じゃ」）が接続することはないが、文法化が進み確認要求という用法を獲得した「じゃない」が、「の」などを介さずに動詞に接続することが許容されるようになったことを、学習者が十分理解できていなかったと考えられる。また、全体を通して「じゃないか」の正答率が高かったのには、3節の教材分析で見たような、教科書等における明示的指導の有無が今回の結果に反映していると考えられるだろう。

レベル別に正答率を見ると、おおむね N1と N2は同じ傾向を示していると言えるが、問題14については、N1の正答率が60.0%なのに対し、N2の正答率が25.0%と差が大きい。

次に、それぞれの被験者の正誤を一覧にしたものを表4に示す。縦軸は正答率の高った学習者順に上から掲載している。横軸は、表3で得られた結果をもとに正答率の高い問題から低い問題へ左から右へ並べている（紙幅の都合上、表3と表4の縦横が逆となっている）。正答数が同数の場合は、N1合格者からN2合格者の順に上から並べている。なお、網掛けをした箇所が正答の箇所である。

表4の特に網掛け箇所の分布からわかるとおり、同じ正答数の被験者の中でも、全員が同じような回答傾向を示しているわけではない。例えば正答数7の被験者を見てみると、全体的に左側に網掛け箇所が寄っていることは見

表4 回答の分布 (Cは正答、Eは誤答)

被験者	問題番号	11	08	12	03	13	19	14	04	17	01	18	15	正答数
	用法 品詞	B 形	B 動	B 名	B 動	B 形	A 名	A 形	A 名	A 形	A 動	A 動	A 名	
027 *	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	12
020 *	C	C	E	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	10
040	C	C	C	C	C	C	C	C	E	E	E	C	E	8
004 *	C	C	C	C	C	E	C	C	E	C	E	E	E	7
011 *	C	E	C	C	C	C	E	C	E	C	C	E	E	7
013 *	C	C	C	C	C	C	C	E	E	C	E	E	E	7
016 *	C	C	C	C	C	C	C	E	C	E	E	E	E	7
018 *	C	C	C	E	E	E	E	C	C	C	E	E	C	7
022	E	C	C	C	C	C	C	C	E	E	E	C	E	7
023	C	C	E	E	C	C	C	E	C	E	C	E	C	7
015 *	C	C	C	C	C	C	C	E	E	E	E	E	E	6
017 *	C	C	C	E	C	E	E	C	E	E	E	E	C	6
025 *	C	C	C	E	C	C	C	E	E	E	C	E	E	6
034 *	C	C	E	E	C	E	C	E	C	E	C	E	E	6
008	C	C	C	E	C	E	C	E	C	E	C	E	E	6
009	C	E	E	C	E	E	E	C	E	C	C	C	C	6
010	C	E	E	C	C	E	C	C	E	E	C	E	E	6
014	C	C	C	C	C	E	E	E	C	E	E	E	E	6
029	C	C	C	C	E	C	E	E	E	E	C	E	E	6
032	C	C	E	C	E	C	E	C	C	E	E	E	E	6
002 *	C	E	C	E	C	C	C	E	E	E	E	E	E	5
003 *	C	C	C	C	C	E	E	E	E	E	E	E	E	5
019 *	C	C	C	E	E	E	C	E	C	E	E	E	E	5
030 *	C	C	C	C	E	E	E	E	E	C	E	E	E	5
035 *	C	E	C	E	E	C	E	C	E	C	E	E	E	5
036 *	E	C	C	C	E	E	C	E	C	E	E	E	E	5
005	E	E	E	C	C	E	C	E	E	E	E	C	C	5
031	C	E	C	E	E	C	E	E	C	E	E	C	C	5
039	C	C	C	E	E	C	E	E	E	E	C	E	E	5
001 *	C	E	E	C	C	E	C	E	E	E	E	E	E	4
028 *	C	C	E	C	E	E	E	C	E	E	E	E	E	4
033 *	E	C	E	C	E	E	C	C	E	E	E	E	E	4
007	C	C	E	E	E	C	E	C	E	E	E	E	E	4
012	C	E	E	E	E	E	E	C	E	C	C	C	E	4
021	E	E	C	E	E	E	E	C	C	E	C	E	E	4
026	E	C	C	C	C	E	E	E	E	E	E	E	E	4
038	C	C	E	C	E	C	E	E	E	E	E	E	E	4
006	C	E	C	E	E	C	E	E	E	E	E	E	E	3
037	E	C	E	E	E	E	E	E	E	C	E	C	C	3
024	E	C	E	E	E	C	E	E	E	E	E	E	E	2

被験者番号横の*はN1合格者を示す。

て取れるが、それでも表の右側、つまり「じゃないか」の問題に目を向けると、被験者によりばらつきが見られることがわかる。一律の回答傾向を示していないということは、学習者の用法についての認識がそれぞれ異なってお

り、共通した誤用の原因が導き出しにくいことを予想させる。

5.3 調査結果 (2) フォローアップ・インタビューの分析

表4で見た回答傾向のばらつきから、「(ん) じゃないか」の使い分けについて、学習者自身がどのように理解し、使い分けしているかをフォローアップ・インタビューというかたちで確認することが重要であると考えられる。この調査では、テスト実施後、それぞれの学習者に「使い分けのルールがわかるかどうか」「わかるとしたら、どのようなルールか」「習ったことがあるか」という3点についてインタビューを行った。ここではその結果の概要について報告する。

まず、「使い分けのルールがわかるかどうか」については、「なんとなくわかる」と回答した被験者が10名、「わからない」と回答した被験者が30名いた。ただ、「なんとなくわかる」と回答した中にも、「勘で」「語感で」と答えた被験者が多数いる。正答率の高かった被験者027(12問中12問正解)も使い分けについては「なんとなく勘で」と答えている。同じく正答率の高い被験者020(12問中10問正解)も使い分けについては「わからない」と答えている。以上のことから、ほとんどの学習者が両者の違いについて、明示的には説明できないことが明らかとなった。そんな中、「わかるとしたらどのようなルールか」という問いに、数名の学習者が明示的にその使い分けのルールについて説明していた。

被験者036(12問中5問正解)は、「会話の場合は、「んじゃない」を使う。意味上大した違いがないと思う。」、被験者035(12問中5問正解)は「「んじゃない」は話し言葉で、「じゃない」は書き言葉」、被験者039(12問中5問正解)は「「んじゃない」は口語的。普段は使い慣れで「じゃない」を多く使う」と答えており、「話し言葉」か「書き言葉」かが使い分けの基準であるとのことである。言うまでもなく、このルールは、学習者独自のもので、本来の使い分けのルールとは異なる。

また、被験者014(12問中6問正解)と被験者015(12問中6問正解)は、いずれも「「じゃない」は否定、「んじゃない」は肯定」と述べている。同じく被験者033(12問中4問正解)も「「じゃない」は完全否定、「んじゃない」は二重否定で肯定を表す」と述べている。ここで「んじゃない」を「肯定」あるいは「二重否定で肯定」としているのは、確認要求の「んじゃない」が、

本来の否定の意味を持たない、という認識から来ているものと考えられる。ただ、三人が指摘するように、一方の「じゃない」が「否定」を表すという説明は当てはまらない。さらに、「習ったことがあるか」という問いに対しては、ほとんどの被験者が「ない」または「忘れた」と回答している。

言語知識には「明示的知識 (explicit knowledge)」と「暗示的知識 (implicit knowledge)」があり、必ずしもフォローアップ・インタビューで明示的に使い分けの規則を述べることができなければいけないというわけでは、もちろんない。しかし、明示的に学んだ知識が暗示的知識の習得を助けることは、現在の第二言語習得研究で広く支持されている考え方であろう。また、暗示的知識として正確に身につくには、多量のインプットが必要ということも言われている。今回、対象とした「(ん) じゃない」は確かに日本語母語話者の間でもよく使用される表現ではあるが、暗示的知識に結びつくほどのインプットの量が学習者のまわりにあるとはいいにくいだろう。さらには、両者の形式的な違いが「ん」の有無だけであること、名詞の場合は、両者の違いが明確でないこと、さらには、地域方言においては「じゃん」「やん」など様々なバリエーションをもって使用されることなどから、やはり周囲からのインプットだけに頼った自然習得は困難だと予想される。何らかの明示的な文法指導が必要であると考えられる。

6. 効果的な指導に向けて

今回、正答率が高かった問題を順に見ていくと、全12問のうち、上位6問と下位6問がちょうど「んじゃないか」と「じゃないか」にそれぞれ対応していることが確認できる。「んじゃないか」はいずれも正答率が高く、6問の平均正答率は61.9%、「じゃないか」6問の平均正答率は32.4%と、両者の間に2倍近くの差があった。「んじゃないか」の中でとくに正答率の高かった問題11（正答率80.0%）、問題8（同72.5%）、問題12（同62.5%）の上位3問について見てみる。

（問題11） 子どものために英語を早めに教えたほうがいいんじゃないかと思う。

（問題8） 彼にはいろいろ問題があるけど、三人の中で一番積極性があるんじゃないかな。

(問題12) 「前文略」B:「もしかしたら山田さんだったんじゃない?ここに山田さんのコップがあるし。」

この3問を見て気が付くことは、問題11が「と思う」、問題8が「かな」、問題12が「もしかしたら」という語と共起していることである。安達(1999)の指摘にもあるように、「んじゃないか」はさまざまな出現形式があることが一つの特徴であり、ここで挙げた「と思う」や「かな」が「じゃないか」につくことはない。問題11は、思考の引用を表す引用節内で用いられた例であるが、「じゃないか」はそもそも聞き手を誘導するタイプの聞き手に向けた確認要求であるから、このように発話者の思考引用節に含まれるものは、「んじゃないか」であると判断することができる。また、問題8は、疑いの形式である「かな」との共起がポイントとなる。また、問題12は、副詞「もしかしたら」との共起がポイントである。宮崎(2005)では、「もしかしたら」を含む「モシカスルト」類が、蓋然性や確信度を表すいわゆる「真偽判断の副詞」でありながら、「んじゃないか」のようなある種の疑問文と共起する点に注目し、詳しい考察を行っている。この中で、「モシカスルト」類は、「かもしれない」に次いで、「のではないか」(本稿における「んじゃないか」)との共起が多いこと、「ではないか」とは共起しないことが指摘されている。

「んじゃないか」は、「かもしれない」や「だろう」につながる「認識のモダリティ」の一つのタイプであり、さまざまな文末形式やモダリティ副詞と共起し、多様な形式で使用される。今回の選択式テストにおいて、「んじゃないか」の正答率が高かったのは、これらの形式がヒントとなっていたことが予想される。これとは逆に「じゃないか」は、文末はほぼ「じゃない(か)。」という言い切りのかたちで使用され、手掛かりとなる形式がない場合が多い。今回の調査においても、問題文すべてが言い切りのかたちとなっており、判断のための有力な手掛かりがない。このことが正答率の低さにつながったことが考えられる。

以上のことから、「んじゃないか」の指導にあたっては、多様な出現形式があること、「もしかしたら」などのモダリティ副詞などと共起することを取りたてて指導することが効果的だと考えられる。とくに前者の多様な出現形式での指導は学習者の「理解」に、副詞との共起については「産出」と結び付けて指導することが可能ではないだろうか。

7. おわりに

今回はダミー問題を含んでいるとは言え、意識的に「(ん) じゃないか」の使い分けの知識を問う問題であった。その結果、使い分けについての十分な説明はできないが、「じゃないか」に比べ、「んじゃないか」に対する理解度が相対的に高いという結果が得られた。今回はテストで使用した「んじゃないか」の例文に、「かな」「と思う」「もしかしたら」などが共起しており、その結果、これらの形式が手掛かりとなり、正答率が高くなったものと結論づけたが、今後はこのことを検証するためにより統制のとれたテストを実施する必要がある。つまり同じ「んじゃないか」でも、これらの手掛かりとなる形式の有無によりその正誤に差が出るかどうか明らかにする必要があるだろう。さらには、共起する形式に依存しにくい「じゃないか」を習得するための、やはり「明示的な」指導についても検討していく必要がある。

いずれも今後の課題としたい。

付記

本稿は2016年度福岡女子大学大学院人文社会科学研究科（言語文化専攻専門科目）「日本語教育特別研究」において実施した調査をもとにしたものである。論文全体の執筆は橋本が行ったが、先行研究・既存教材の分析、調査の実施および考察は、王杉、鋤野亜弓、辺紅梅、美玲、李会婧が行った。

注

（注1）ACTFL-OPI とは、ACTFL（全米外国語教育協会）が開発した外国語学習者の口頭能力を測定する試験（Oral Proficiency Interview）のこと。テスターはACTFL の評価基準に沿って、30 分間のインタビューの中で学習者の外国語口頭能力を測定する。レベルは、超級（Superior）、上級（Advanced）、中級（Intermediate）、初級（Novice）に分かれており、上級以下はさらにサブレベルとして、上（High）、中（Mid）、下（Low）が設定されている。なお、例文（3）（4）はいずれもこの OPI を文字化したコーパスからの例である。

（注2）Web（国立国語研究所プロジェクト『日本語教育データベースの構築——日本語学習者会話データベース』<https://nknet.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/opi/>）で公開されている音声データによる。

参考文献

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
- 奥野由紀子・金庭久美子・山森理恵 (2012) 「「じゃないですか」「じゃない」「じゃん」の確認要求表現を用いた段落形成——学習者と日本語母語話者の会話から——」 *The 19th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings* Princeton University 8.
- 家村伸子 (2003) 「日本語の否定表現の習得過程——中国語話者の発話資料から——」『第二言語としての日本語の習得研究』6、pp.52-69、第二言語習得研究会
- 金京実 (2001) 「中間言語としての確認要求表現「よね」「だろう」「じゃないか」——韓国入日本語学習者を中心として——」『人間文化学研究集録』10、pp.48-58、大阪府立大学大学院 人間文化学研究科・総合科学研究科
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) ——対話資料による研究』秀英出版
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I ——「のだ」の意味と用法——』和泉書院
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 橋本直幸 (2015) 「書き言葉コーパスに基づく文法シラバス」、庵功雄・山内博之 (編) 『データに基づく文法シラバス』 pp.67-86、くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為——「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法——」、仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』 pp.389-419、くろしお出版
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89、pp.111-122
- 宮崎和人 (2000) 「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106、pp.7-16
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現——疑いと確認要求——』ひつじ書房

教材分析 対象資料

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2001) 『大学・大学院留学生の日本語②作文編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002) 『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』アルク
- 石川恵子・山本忠行・日高吉隆 (2008) 『日本語3rd ステップ——表現文型で学ぶ中級からの日本語』白帝社
- 石黒圭・筒井千絵 (2009) 『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 岩田夏徳・初鹿野阿れ (2012) 『にほんご会話上手！聞き上手・話し上手になるコミュニケーションのコツ15』アスク出版
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 三枝令子・中西久実子 (2003) 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現——モダリティ・終助詞——』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (2008) 『みんなの日本語中級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (2010) 『みんなの日本語中級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク

- 筑波ランゲージグループ (1992) 『Situational Functional Japanese volume3. NOTES』 凡人社
友松悦子・和栗雅子・宮本淳 (2010) 『新装版どんなときどう使う日本語表現文型辞典』 ア
ルク
名古屋大学総合言語センター日本語科編 (1988) 『現代日本語コース中級 I』 名古屋大学出
版会
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生・留学生のための論文ワークブック』 く
ろしお出版
森山卓郎・安達太郎 (1996) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 6 文の述べ方』 くろし
お出版
山内博之 (2013) 『新版ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』 アルク

